

再臨(ロゴス東京メッセージより)

マラナサ・グレース・フェロシップ 菊地 一徳氏

再臨、英語ではそれを second coming と言います。イエス・キリストが 2 回目に戻って来られる、second です。coming といのは“来る”という事ですから、英語で捉えると非常に分かりやすいかと思えます。The second coming が日本語では『再臨』というふうに専門用語で言います。その再臨というのは勿論その前にイエス・キリストがこの世に臨まれた、来られた。それが『初臨』と言います。英語ではそれを first coming と言います。最初に来ると。ですから 2,000 年前のクリスマスにイエス・キリストがこの世に来られて、人として生まれてから地上生涯を送られ、そして十字架の上で死なれ、葬られ、3 日目によみがえって、そして 40 日後に天に上げられた、つまり昇天された。そこまでが初臨という内容であります。それに対して再臨というのは世の終りにもう一度イエス・キリストが戻って来られる、再び臨まれる。それを再臨、second coming と言うわけです。

その再臨に関して使徒の働き 1 章 8～11 節を、まず最初の箇所です。多分 25 箇所ぐらいになると思うんですが、それ以上になるかもしれませんが。眠気覚ましになると思えます。再臨に関してはイエスは「目を覚ましていなさい。」とおっしゃっていますから。『⁸しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全 1 土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。』⁹ こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなされた。¹⁰ イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。¹¹ そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。』またおいでになりますと。これは再臨ということなんですが、キリストの来られたことをもう一つ来臨という言い方もいたします。その来臨には 2 段階あると、先ほど初臨と再臨があると言いました。そして実はその再臨にはさらに 2 段階あります。ちょっとややこしいなあと思えるかもしれませんが、再臨にも 2 段階あります。これは勿論いろんな聖書の教理の立場、終末論の立場によって様々あるんですけども、聖書を純粹に素直に字義通りに読もうとするならば、そこには再臨については 2 段階あると。そしてその 2 段階、これを分かりやすく表現しますと、1 段階目が“**聖徒のための再臨**”とよく言われます。聖徒というのは私たちクリスチャンのことです。聖徒のための再臨。クリスチャンのための再臨。そして 2 段階目が、次に来るのが、“**聖徒を従えての再臨**”。クリスチャンたちを従えての再臨と言って良いと思えます。

そしてその最初の 1 段階目の聖徒のための再臨、これについては**第一テサロニケ 4 章 17 節**も目を留めて頂きたいと思えます。『¹⁷次に、生き残っている私たちが(ここにいる皆さんです。)、たちまち彼らといっしょに(彼らというのは後で読みますけれども、既にキリストにあって眠った人たち、亡くなった人たち、すなわち召天された人たちといっしょに)雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。』これが聖徒のための再臨、これを別名『空中再臨』とも言いますし、そして『携挙』とも言います。これから私は携挙という言葉が頻繁に使いますから、それは聖徒のための再臨、あるいは空中再臨だというふうに考えて下さい。携挙という言葉が初めて聞いたという人もいます。携挙の“携”は携帯電話の携、携えるという言葉です。“挙”というのはここに挙げられている“一挙に”の“挙”です。携え挙げる、地上から教会が、クリスチャンが、キリストの花嫁と呼ばれる私たちが、生きている者がこの地上から一挙に空中に引き上げられて雲の中で主イエス・キリストと顔と顔を合わせるようになる。これは素晴らしい体験となります。

もう一つ 2 段階目の再臨、聖徒を従えての再臨というのが**ユダの手紙 14～15 節**をお読みします。『¹⁴アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。(聖徒を引き連れて来る、聖徒を従えて来ると。)¹⁵ すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』何となくちょっと怖いイメージですね。罪に定めるなんていう言葉が、ちょっと怖い印象持たれるかと思えます。このことを『地上再臨』とも言います。イエス・キリストが空中ではなくて今度は地上にまで降り立つ。特に

ゼカリヤ書 14 章 4 節というところには、『その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。』と。主の足はオリーブ山の上に立つ。そしてオリーブ山が真っ二つに分かれるというふうな地殻変動まで起きる、そんなことまで預言されています。旧約聖書にはこの地上再臨について沢山の預言があります。ある人は 1,500 箇所以上あるというふうにも言います。なかなか旧約聖書を読んでいてキリストの再臨について意識して読むという方はあまり少ないかもしれませんが、実は 1,500 箇所以上もキリストの再臨に言及する預言箇所がある。勿論初臨と呼ばれる、イエスが来られたという 2000 年前のその出来事も旧約聖書の中には預言されておりました。それについては 300 箇所以上とか、350 箇所以上預言があって、そのすべてはもう 2000 年前に成就しているということです。ですから再臨についても 2 段階あると言いましたから、実は 1 段階目というのは旧約聖書では触れられていない部分なんです。これも後で詳しく説明しますが、ただ 2 段階目の地上再臨については 1,500 箇所以上も言及されて、それも初臨と同様に必ず世の終わりに成就する、実現するというものです。このように再臨というものには 2 つの別々のイベントが含まれているということです。

簡単に、今は一つ一つ詳しく説明するわけにはいかないので、簡単に、これらはどのように違っているのかと。同じ再臨という言葉を使っていますが、全く別のイベントです。一つは聖徒のための再臨。もう一つは聖徒を従えての再臨。それぞれの目的も違います。それぞれの来臨の仕方も違います。そのいくつかを簡単にまとめましたので、メモしたい方はメモして下さい。まず最初に来るのが聖徒のための再臨、空中再臨、携挙ですが、その時の動きというのが、天からイエスが来られて、そして地上にいる教会が、クリスチャンが、下から上に引き上げられる。携挙という言葉がそれを表しています。ですからその動きというのは、地上から天に聖徒たちが携え挙げられていく。その一方で 2 番目の 2 段階目の聖徒を従えての再臨、もうその名の通り従えてくるわけですから、それは下からではなくて上から来るわけです。ですから、その前に上に挙げられていなければいけないわけです。上に挙げられているから、上から今度は下に降って来ることが初めて叶うわけです。そのようにして 2 段階あるわけです。動きがまず最初に地上から天に引き上げられる、下から上に、それが 1 段階目。そして 2 段階目は、上から今度は下に降って来る。それはイエスと共に私たちも一緒に降ってくるようになるということです。そしてタイミングなんですけれども、1 番目の聖徒のための再臨、携挙は、いつ起こってもおかしくない。今でも携挙があって然るべきなんです。不思議ではないんです。ですからいつでも起こりうる出来事だと、イベントだというのがその携挙というものです。

その一方で地上再臨と呼ばれるもの、便宜的にも再臨というふうに表現させて頂ければと思うのですが、その再臨というのはちゃんと然るべきタイミングがあります。細かい前兆というものを今一つ一つ挙げるわけにはいかないんですが、大まかに世の終わりになりますと反キリストなる世界総統が現れます。この人物は軍事的にも政治的にも世界を治める、今世界はリーダー不在の時代です。アメリカもリーダーシップを失いました。ヨーロッパもリーダーシップを失っています。そして中東は混沌としております。誰かがこの事態をまとめなければ。そこで彗星の如く現れるのが反キリストなる人物です。そしてこの人物が見事にその中東和平をやったのけるわけです。これから見ものです。その時に 7 年間の和平条約を結びます。その際にまた今は無きエルサレム神殿を再建するという今まで誰も成し得なかったことをします。ユダヤ人たちは自分たちの神殿を再建してくれる者こそが約束のメシアであると、未だにそのように信じているわけです。ですから彼らはその反キリストをまさに自分たちのメシアだと錯覚するわけです。でもそうでなかったということが後で分かるんですけれども。ですからその再臨というのは、実はその 7 年間、これを患難時代とも聖書は表現します。患難は難しい時代になる、困難になる。迫害とか、また前代未聞の未曾有のいろんな災害も伴うような時代となっていきます。世界は混沌とします。それは何故かと言いますと、世の終りになると携挙という教会が地上から引き上げられて、もう地上にはいなくなるわけです。そしてその後、反キリストが現れて 7 年間、世の終りの最後の時代となります。その時代が何故患難かと言いますと、キリストを拒絶した罪の世界に対して神の怒りが、或いは子羊イエス・キリストの怒りが注がれる時代となるから患難というわけです。そしてまたこれは特別にイスラエル民族においては患難と言われる時代となります。もうこれ以上触れませんが、その 7 年間の終わりに

なったら、イエス・キリストが天から私たち聖徒を携えてきて降る、地上に文字通り降り立つ。ですからもうタイミングがある程度計れるわけです。反キリストが現れてから 7 年間のその和平条約があって、しかも神殿まで再建されたら、もうイエスが地上に戻って来られる時期はある程度計れるわけです。その一方で第一段階目の携挙は、それは何の前兆もないわけです。いつ起こっても不思議ではない。そのタイミングが大きく違います。

そしてもう一つは携挙というのは、第一段階のその再臨というのは、実は聖書では奥義おくぎと呼ばれています。第一コリント 15 章 51 節というところでは携挙のことが書いてありまして、それは奥義であると。普通日本語では奥義おくぎと言います。ギリシャ語では「ムステリオン」と言っていて、これは英語の「ミステリー」の語源です。「ムステリオン」というのは隠されていたものが明らかになる。旧約聖書の中に実は携挙というイベントは隠されているんです。ですから奥義と呼ばれるんです。ところが新約聖書にその携挙が奥義であるということで明かされていくわけです。旧約聖書においてはミステリーでも、新約聖書においてはそれはリアリティーとなるわけです。そしてその第一コリント 15 章 51 節は『⁵¹聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。⁵²終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。⁵³朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。』と。奥義という言葉、それは「ムステリオン」で、これは携挙のことを言っています。携挙の時にこういうことが起こるんです。私たちの肉体は一瞬にして朽ちないものに変えられる。今皆さんの肉体は朽ちています。言われなくても分かると思います。でももう朽ちないものに、老化もありません、病気にもなりません、障害にもならなければ、罪も犯さない、復活したキリストと同じ姿に変えられる。これは希望に満ちた話であります。それが携挙の時に起こるわけです。一方で再臨というのは、これは旧約にも新約にも両方に言及されているものです。携挙だけは、これは特別なものだと。そのことだけ今頭に留めておいて下さい。

もう一つ 2 段階の別々のイベントである聖徒のための再臨、携挙は、救われた者だけを対象としています。クリスチャンだけを対象としたものです。その一方で聖徒を従えての再臨、地上再臨というものは、これは特殊なんですけれども、“救われている者”も、そして救われていない者も対象となるイベントです。“救われている者”というのは、私たち教会が携挙された後にも患難時代、7 年間ありますが、そこでも救われる人たちが出るんです。その人たちのことを今私は“救われている者”と。そして“救われない者”も実はこの再臨に全く関わらないわけではなくて、大いに関わります。というのは先ほどちらっと読みましたが、ユダの手紙のところでは『罪に定められる』という裁きが伴うということも、この地上再臨には含まれています。

そして、もう一度携挙のことを明確に教えている箇所、第一テサロニケ 4 章 13～18 節のところを見て頂きたいと思います。さっきはその中で 17 節だけを読みまして、その前後を開いて頂きたいと思います。『¹³眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。(ここでは皆さんに知らないでいてもらいたくない。是非知っていてもらいたいという内容が続きます。)あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。(他の希望のない人たちのように悲しみに沈むことがないように。眠ったというのは、これは亡くなった人たち。愛する人を失って、もう望みがない、希望がない、悲しみに沈んでしまう。そういう人と私たちは違うんだということです。希望があるんだということです。)¹⁴私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。¹⁵私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。¹⁶主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに(さっきも第一コリント 15 章のところ“終わりのラッパ”という言葉が出ていました。)、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、¹⁷次に、生き残っている私たちが(ここにいる皆さん全員です。)、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。¹⁸こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。』この携挙の教えは私たちにとっては慰めになる教えです。希望とも言えると思います。この携挙が希望である

という事は、そこかしこに書いてあります。私たちはいろんな希望を持ちます。若い人は希望に満ちていると思います。歳行ったら希望が段々薄くなっていくかもしれません。でもクリスチャンには若かろうと歳を重ねて年寄りになったとしても素晴らしい希望が与えられております。その希望、それが携挙であると聖書は言います。

ローマ人への手紙 8 章 18 節から、この時間をもって皆さんは大体再臨に関する箇所をある程度網羅することが出来るかと思えます。ですからメモして頂ければ、後でじっくりと皆さん読んで頂けるかと思えます。ローマ 8 章 18 ~25 節まで。『¹⁸ 今の時のいろいろの苦しみは(皆さん今いろいろな苦しみをお持ちでしょうか。苦しみの中にあるでしょうか。)、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。(この栄光こそ携挙です。私たちの朽ちてしまう体が、朽ちない体に栄光化するというふうに表示します。)¹⁹ 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。(この神の子どもたちの現れというのは私たちのことです。携挙の時の私たちのことです。)²⁰ それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。²¹ 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。(私たちは罪を犯しましたので、朽ちる者、死ぬべき者となったわけです。最初の先祖アダムとエバも罪を犯したので、その結果地はのろわれたものとなった。被造物全体が、神に造られたものが、自然界も動物界も皆、私たち人間の犯した罪のしわ寄せを受けているわけです。弱肉強食の世界、或いは自然の猛威、自然災害。これはある意味天災ではなくて人災であります。私たちの罪が原因です。その背後にサタンが働いているわけですが、でも私たちの罪が完全に贖われて、それはただ霊的なだけではなくて肉体的にも朽ちてしまう体が、死ぬべき体が朽ちない、死なない体に栄光化されることで、被造物ももう罪によって汚染されていたわけですが、被造物もまた贖われる、元通りに回復される。天地創造時の人類が墮落する前のパーフェクトな状態です。神の目に非常に良かったというところに戻されるわけです。それがこの被造物が贖われるということです。)²² 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともいうべきともに産みの苦しみをしていることを知っています。²³ そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。(私たちもそうなることを願っていますが、被造物も願っているんです。皆さん家にペットを飼っていますか。うちにも愛犬がいますけれども、うちの犬も携挙を待ち望んでいるんです。まず飼い主の私が救われて、そして私が携挙されれば、私の犬も、実はウェルッシュコリーという犬なんですけれども短足なんです。贖われたら足が長くなるかもしれません。それは冗談ですが、でも、動物界も例外なく、自然界も例外なく、私たちの罪のとぼちりを受けているわけです。残念ですが素晴らしいものでも天地創造時の状態から比べればそれは神の栄光を完全にあらわしているものではないわけです。今見ている自然もそうです。皆さんが庭で育てている大切な植物もそうです。そんなものじゃないんです。こんなものじゃないんです。それが全て贖われて回復される。そういう時が来るわけです。それがまず私たちの携挙から始まるということです。)²⁴ 私たちは、この望みによって救われているのです。(当然クリスチャンですから罪の罰からは救われているわけです。罪の力からも救われています。霊的に救われているわけです。でもまだ肉体はどうでしょうか。罪を犯します。罪の性質を抱えています。すぐに誘惑に陥ります。今朝も皆さん罪を犯したと思います。私も罪を犯しました。でももう罪を犯さなくても良い、そういう体がいただけるわけです。)目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。²⁵ もしまだ見えていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。』こんなものじゃないんです。クリスチャン人生はこんなものじゃないんです。今の苦しみは取るに足らないと考えて下さい。重い永遠の栄光というものが、今の患難を軽いものと考えさせます。それが1つ、携挙。それが私たちの希望と呼ばれるものであります。

第一ヨハネ3章2~3節、そちらも携挙に関しての教えです。空中再臨の教えです。『²愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら(携挙です。空中再臨です。)、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。(今は自分を見ても、隣の人を見ても、クリスチャンなのにキリストとは似ても似つかない、程遠いと思うかもしれません。それで自分にもガッカリし、また人にも

ガッカリし、「クリスチャンのはずなのに、クリスチャンのくせに、あれでも牧師か。」と。でもいつかキリストに似るんです。素晴らしいですね。天国では皆私たちはキリストの似姿に変えられるんです。子供でキリストを知って亡くなった者も天国に行ったらキリストと同じ姿です。赤ちゃんで死んで、天国に行ったら赤ちゃんの姿で再会するかと思ったら大間違いです。キリストの姿で再会するのです。よぼよぼのおじいちゃん、おばあちゃん、クリスチャンとして天に召された人たち。天においてもそのよぼよぼのシワだらけの姿で再会するかと思ったら大間違いです。ピンピンのおそらくイエスと同じ位の 30 代ぐらいの素晴らしいパーフェクトな体で再会出来るわけです。)なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。³キリストに対するこの望みを(希望を)いただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。』

携挙の希望を持つ者は、ライフスタイルが変わるんです。価値観が変わるんです。世界観も変わります。人生観も変わります。キリストが清くあられるように、自分を清くするようになる。素晴らしい効果が伴うわけです。この携挙を知っているのと知らないのでは大違いです。勿論ただ頭で知っているだけでは不十分ですが、本気でこれを我が望みとするならば、あなたは変わります。あなたの人生も変わります。今までの教会生活は一変します。それほど素晴らしい希望だと聖書には書いてあります。クリスチャンなのに「私には希望がない。お先真つ暗。堂々巡り。救われたのはもう 20 年前、30 年前。でもその時とはちっとも変わらない。否あの救われた時、川で洗礼を授かった時、あの時の方がもっと生き生きとしていた、もっとエキサイトしていた、熱心だった。でも今は、日曜日に教会に行くのがやっつです。」とか。教会に全然行ってなかったけれども今日は久しぶりに声がかかってキャンプに来ましたとか、そういう方もあるかもしれません。何か力がない、何かガッカリしている、何か落胆して沈みがちで、スランプがちで力がない。平安がない、喜びがない。そういうクリスチャンはいっぱいいますが、この携挙の希望を知るならば必ず変わります。

テトス 2 章 12～13 節にも希望について書いてあります。何度も言いますが、来れなくても心配ないです。と言うのは聖書には「信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについてのみことばによるのです。」と。信仰は読むことから始まるとは書いてありませんから、聞くことから始まりますから。勿論聖書を読む事は大事ですが、でも聞くことが大事です。神に聞くということです。『**12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、**(「クリスチャンとしてそうあれたらいいなあ。」とここまで読んだらそう思うと思います。でも私にはこんな生活は無理、難しいと。でも 13 節を見て下さい。) **13 祝福された望み**(希望です。ただの希望ではないです。祝福された望み。これ以上ない望みです。)、**すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを**(携挙を、空中再臨を)**待ち望むようにと教えさとしたからです。**』携挙の希望を持つならば、この希望によって救われるのです。この希望によってキリストにこの望みを抱く者は、キリストが清くあられるように自分を清くしますと。出来なかったことも出来るようになります。難しいと思ったことも出来るようになります。今まで手がつけられなかったことにもチャレンジすることが出来ます。単なる希望じゃない、単なる淡い願望ではない。聖書の希望というのは、良いものが来るという絶対的な確信を意味しています。イエス・キリストが来られる、これは絶対的な確信であると聖書は言うわけです。来たらいいなあとか、理想だなあとか、希望的観測でもないんです。そうなったらいいなあじゃなくて、間違いはないんです。これは起こることです。そして、それは今日かもしれない。今かもしれないことです。

ここで皆さん、大体携挙の事はお分かりになったと思うんですけれども、今からその携挙のもたらす希望と共に、もう一つ私たちがこの携挙の事実を知った時に生活が変わると言いました。生き方が変わると言いました。世界観や、人生観や、信仰観も変わると言いました。勿論聖書観も変わります。その大きな変化、そのライフスタイルにまで及ぶ影響、それについて最後ちょっと触れてからこの時間を後にしたいと思っております。2 段階の再臨ということを行いましたけれども、その 2 段階の再臨、それぞれ聖徒のための再臨、空中再臨、携挙。もう一つは聖徒を従えての再臨、地上再臨というものです。そしてその 2 つの段階には、2 つの或いは 2 種類の裁きがあるということも覚えておいて下さい。2 種類の裁きが、裁きと聞くと「ちょっと怖いなあ。」と思うと思うんですけれども、携挙に関しては

今まで聞いた中で全然悪いイメージはなかったと思います。でも携挙にも裁きが含まれております。それについて**第二コリント 5 章 10 節**『¹⁰なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』これはよく『キリストの御座の裁き』とも言います。ここで言われている“さばきの座”というのは法廷というよりも、むしろこの“さばきの座”というギリシャ語は「ペイマ」と言います。「ペイマ」というのはオリンピックの表彰台を表す言葉です。ですからここに“報い”という言葉が使われます。表彰台に立って報いを受ける。審判者から「よくやった。」と、競技において大活躍した、ルールに従って良い成績を残した、そういう人には褒賞が与えられるわけです。ですからこの裁きというのは、怖いイメージではなくて、それぞれにメダルが授与されるような、褒賞が与えられるような、そういった裁きです。それを『キリストの御座の裁き』とも言います。

そして、2 段階目の聖徒を従えての再臨に伴う裁き、地上再臨の裁きというのは、これは先ほど**ユダの手紙 14 ~15 節**でも読んだ通り、それは罪に定める裁きであります。これが所謂裁きです。所謂これが『最後の審判』と呼ばれるもの。ちょっと怖いイメージに聞こえる言葉だと思います。**黙示録 20 章 11~15 節**にその最後の審判がどんなものか書かれております。ちょっと時間の関係上読むことはしません。(『¹¹ また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。¹² また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行いに応じてさばかれた。¹³ 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。¹⁴ それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。¹⁵ いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。』むしろ私はその前者の携挙にまつわる裁き、キリストの御座の裁きについて重点的に今から話したいので、後で読んでみて下さい。大きな白い御座の裁きとあります。いわゆる江戸時代の大岡裁きの御白洲、白い御座の裁きです。その時にキリストを拒絶した罪の世界に最後の審判が下るわけです。勿論サタンにも審判が下ります。

そして、携挙はまとめますと、クリスチャンの信仰生活はよく競技にたとえられています。レースとか、戦いというふうによくたとえられるわけですが、審判者であるイエス・キリストが「あなたはよくルールに従ってよく頑張った、よく戦い抜いた、良い成績を残した。私はあなたに報いを与えよう。」報いというのは他にも、冠を与えようと。古代オリンピックではメダルではなくて冠が与えられたわけですが、その冠も報いというふうに聖書は表現します。その報い、或いは冠と言われている箇所、それも沢山あるんですけども、いくつかお読みしますので、出来たら皆さんもメモだけして頂いて、じっくりとどういふ報いがあるのか。これはクリスチャン全員に関わる事ですから関心を持って読んで頂きたいと思います。あなたもイエスの前に立つんです。携挙された後に、このキリストの御座の裁き、「ペイマ」と呼ばれる表彰台に立つわけです。その時イエスからあなたは褒め言葉を頂き、そして報いを、或いは冠を頂くわけです。そのようにあなたは期待して毎日時間を過ごしているのでしょうか。そういう日がやって来る。そしてそれは今日かもしれないと、あなたは意識して生活しているのでしょうか。**第一コリント 9 章 24~25 節**にはこうあります。『²⁴ 競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。²⁵ また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けのためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けのためにそうするのです。』世界のスポーツのいろいろな代表、オリンピックの代表もそうですし、ワールドカップの代表とかも皆、賞を受けのためにストイックなまでに日々鍛錬します。クリスチャンはどうでしょうか。私たちが朽ちない冠が与えられるわけです。でも全然そんなことを意識していなければ、多くの人たちは自分のためだけに、私利私欲のためだけに、自分の人間的な希望を叶えるために、或いは願望を叶えるために、時間というものを、或いは労力というものを、或いは資金というものを無駄に使ってはいないのでしょうか。これはもったいないという話になります。

他にピリピ人への手紙 3 章 14 節。『¹⁴キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を

目ざして一心に走っているのです。』これがクリスチャンの姿でなければならぬと。あなたには目標がありますか。一心に走るような、それを目当てに、それをゴールに向かっていくような、そういうクリスチャンライフを送っているでしょうか。それともあてどなく、「一体自分はどこに向かっていくのかよく分かりません、ピンときません。日曜日に教会へ行くぐらいです。」

或いは黙示録 2 章 10 節には『¹⁰あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをたたくために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。』“いのちの冠”という言葉が使われています。これはいのちの冠です。命がかかるんです。勿論これは朽ちない命です。永遠の命の冠です。

また黙示録 3:11 には『¹¹わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。』あなたの冠をだれにも奪われないようにしなさいと。折角冠が与えられるチャンスが今地上生涯において皆さんに与えられているのです。でも私たちがそのチャンスを逸脱すれば、逸するならば、冠を受けるその機会を失うわけですから、これは奪われるに等しいことです。沢山の冠を頂ける、たくさんの報いを頂ける。なのに、そのためではなくて、朽ちてしまうようなもののために労力を、生涯を無駄にしてしまうならば、それは奪われることに等しいわけです。無駄にしてしまうということです。

「でも私のような者はとてもじゃないけれどもそんなに頑張れません。そんな冠だとか報いだとか、頑張れそうもありません。私のような無能な者にはとても無理です。あの人たちならばそれは得られるでしょうけれども、私のようなクリスチャンには。」と思う人もあるかもしれませんが、第二テモテ 4 章 8 節に、これは皆さんにとって慰めになる言葉だと思います。今まで自分とは関係ないなど思っている人も大いに関係があります。『⁸今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。(私だけです、とは言っていない。パウロだけ、とは言っていない。)私だけでなく、主の現れを慕っている者には(あなたにも、私にも、皆さんにも)、だれにでも授けてくださるのです。』だれにでも、です。あなたができていないクリスチャンでも、ここに書かれている通りに「主の現れを(携挙を)慕っている」ならば、待ち望んでいるならば、あなたにも栄冠が与えられると。だれにでも、です。漏れなくです。ですからここでの問いは、皆さんはどれほど良い意味で食欲に求めていくかということです。1 個もらえるからいいや、じゃなくて。沢山貰えるならばそれに越したことはないわけです。

そして、第一コリント 3 章 10~15 節までお読みします。『¹⁰与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。(皆さんの自分の人生について考えてみて下さい。今までどのような人生を送ってきたでしょうか。)そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。¹¹というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。¹²もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、¹³各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をたたくからです。¹⁴もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。¹⁵もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をぐるぐるとして助かります。』金、銀、宝石というのは、朽ちないものです。火に耐え得るものということでここに表されています。その一方で、木、草、わらというのは、火に耐えられないものです。焼かれて灰になってしまふ。すべて消えてなくなるもの。永遠に価値のないものです。皆さんは永遠に残るもののために今生きているでしょうか。それは目に見えないものと言っても良いと思います。目に見えるもののために人生を費やしておられるでしょうか。もったいないと聖書は言います。なぜならば C・S・ルイスという人が言っていますけれども、「永遠に残らないものは、永遠に役に立たないものである。」と。今は目に見えるものを皆さんは求めて、「これが人生の役に立つんだ。これが老後になったらものを言うんだ。金がものを言うんだ。」と、そのために熱心に頑張っているかもしれません。でもそれは、永遠

には役に立たないものだと聖書は言うのであります。何のためにあなたは与えられた命を、人生を、あなたの体を労しているでしょうか、活用しているでしょうか。それは金、銀、宝石に等しい永遠に価値のある、火によっても残るもの。それとも火によってはもう灰になってしまうものでしょうか。そういった報い、或いは冠ということが、聖書のそこかしこに書いてあります。イエス・キリストも弟子たちに度々迫害があっても報いが大きいから、あなたたちも迫害されても預言者と同じ報いに与るからとか。或いは、イエスの名によって水いっぱいでも提供すれば報いに漏れる事はありませんと。マタイの福音書 10 章 40～42 節に、そのようにハッキリ書いてあります。水一杯でもイエスの名によってこの小さな子供にあげるなら、報いに漏れないと。素晴らしいです。「私には大それた事は出来ない。人の前に立って語ることも出来ない。教会においてもそれほど貢献出来るような働きは出来ない。」でも水一杯ならあなたにも出来るでしょう。そんな些細な事でも神は覚えていて下さるんです。それはカウントされるんです。そう思ったらわくわくしてきます。勿論報いを得るためにいろいろ我力で、我欲でという事ではないんですけれども、ただ喜びを持って些細な事でも小さな事でも、イエスの名によってこれでイエスが喜んでくださる。これでイエスの御名があがめられる。これで神の栄光が表される。食べるのにも飲むにも神の栄光を現わすためにするならば、必ずそれは神において覚えられてカウントされます。それは報いに算定される。それは冠に変換されるわけです。そうするとやり甲斐があります。無理矢理やらされるとか、強制されるとか、渋々クリスチャンだから、当番だから、順番が回ってきたから、じゃないんです。「これは絶好の機会です。神様有難うございます。こんな素晴らしい特権を与えてくださって、あなたにお仕え出来るこのチャンスを感謝します。」人には認められないと思います。人には感謝されなくても、教会で崇められなくても、この世で賞賛されなくてもです。神がかの日には誉めて下さいます。

報いとか、冠とか、具体的にはそれはどういうものかということは、皆さんには関心があると思うんですけれども、R・C・スプロールという人が、この人は有名なアメリカを代表する神学者の 1 人ですけれども、牧師の 1 人ですが、この R・C・スプロールという人がこういうことを言っているんです。「天国で与えられる報酬には段階がある。この答えに多くの方が驚くということに、私は驚く。(皆さんももしかしたら今日報いなんてことを聞いて驚いたかもしれません。)地獄で罰の厳しさの度合いに段階があり、それと同様に天国にもいろいろな段階があると私が言うと、クリスチャンたちは衝撃を受けるが、それには理由があるのだと思う。(天国にも地獄にも実は報いの段階があると。それは聖書に書かれているんです)」

もう一人、チャールズ・スタンレーという、この人もやはりアメリカを代表する有名な牧師ですが、「神の国はすべての信者にとって同じではない。(シヨッキングかもしれません。)このように言い換えても良い。地上での忠実さゆえに報いを受ける信者たちもあれば、受けない者たちもいる。キリストとともに治める者たちもいれば、治めない者たちもいる。神の国において富む者たちもいれば、貧しくなる者たちもいる。まことの富を与えられる者たちもいれば、与えられない者たちもいる。自分のものである天の宝を受ける者たちもいれば、受けない者たちもいる。」と。それらの箇所も実は皆さんに是非お伝えしたいと思うんですけれども、今はそれがちょっと時間の関係上出来ないの、聖書を読めば実はこうした事実がしっかり書かれています、明確に書かれているんです。でも私たちはそれを人ごとのように思っているかもしれません。天国に行ければそれでいいやと。でも、そこに報いとか冠というものがかかってきたら、ただ天国に行ければそれでいいとはならないと思います。

これでもうそろそろ終わりにしたいと思うんですけれども、マタイの福音書 24 章 45～51 節。『⁴⁵主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。⁴⁶主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。⁴⁷まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。⁴⁸ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい』と心の中で思い、⁴⁹その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、⁵⁰そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。⁵¹そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。』これを人ごとと思ってはならないと皆さんにお伝えしたいと思います。ここで言われている“しもべ”は、勿論たとえですけれども主人であるイエス・キリスト

のしもべである私たちのことです。私たちの中にも実は 2 種類のしもべがあると言っています。一つは忠実な賢いしもべです。もう一つは悪いしもべです。その違いは読んだ通りであると思います、分かると思います。悪いしもべは「主人はまだまだ帰って来ない。携挙なんてまだまだ先の話でしょう。今あるなんて馬鹿らしい。信じられない。」それは悪いしもべです。「悪い」という言葉は「カコス」というギリシャ語ですけれども、以前良かったものが悪くなる。果物がだんだん腐っていくような、そんなイメージを持って頂ければと思います。この 2 種類のしもべは同じく主人のしもべなんです。ここを忘れないで下さい。悪いしもべは主人のしもべではない、じゃなくて主人のしもべなんです。悪いしもべなんです。でも、しもべはしもべです。でも残念ながら 51 節では、『その悪いしもべをきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。』ちょっと怖くなったかもしれません。或いは 25 章 21 節のところにも、これはタラントの話ですから皆さんよく知っていると思います。『²¹その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』²³節にも同じことが繰り返されています。『²³その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。』これが表彰台で私たちが主人から、イエスから聞かされる言葉でなければならないと思いますし、そうありたいと思います。その一方で 25 章 30 節を見て下さい。『³⁰役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。』泣いて歯ざしりする。やだなあ、と皆さん思うと思います。そしてそれはノンクリスチャンのことでしょう、不信者のことでしょうと。そうではありません。ここで“しもべ”という言葉が使われています。これは主人のものです。主人の所有のしもべの話をしております。皆さんが今日携挙があった時、主の前に立った時、堂々と胸を張って「私はあなたに与えていただいたこの体を、この命を、この時間を、この体力を、このすべてのタラントを、タラントを、あなたのために活用しました。イエスの御名をあがめるために、イエスを伝えるために、神の栄光を現わすために。」堂々と胸を張って言えるならば、あなたは沢山の報い、或いは冠と呼ばれるものを。「よくやった。良い忠実なしもべだと。あなたは、わずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」と、イエスからの褒め言葉を、絶賛の言葉を頂きます。

でも、あなたがもしとても恥ずかしくて主の前には立てない、とても顔向け出来ない。折角与えられた命を、この時間を、私はイエスのためではなくて、まさに自分自身のために使ってきてしまいました。牧師でも例外ではないです。教会を大きくするために、自分の名を上げるために、評判の良い牧師になるために、いい人と思われるように、信徒から人気をとれるように、沢山の献金が入るようにとか。全部イエスと関係ない動機でミニストリーと呼ばれるもの、神の働きと呼ばれるものに携わっていても同じことが起きます。泣いて歯ざしりするんです。「あの時あぁしておけば良かった、こうしておけば良かった。」今まで皆さんも沢山のことを後悔してきたと思いますが、でもこの時こそ今まで皆さんが 1 度も体験したことがないほどの後悔に見舞われます。これ以上ないほどに泣きます。号泣します。あまりに残念で、もったいなくて、なんてことをしてしまったんだろうかと。

これで終わります、と言ったら皆さん、来年からもう私は呼ばれないと思いますが。(笑い) 良い知らせがあります。黙示録 21 章 4 節のところに『彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』たとえキリストの御座の裁きにおいてあなたが後悔して号泣したとしても、その後あなたはこのイエスによってすべての涙があなたの目からぬぐい取って、ぬぐい去って頂いて天国に入ることが出来ます。ですから間違いなく天国で永遠に一生後悔し続けるわけではないです。それはこのキリストの御座の裁きのその瞬間だけです。でもその後報いが与えられて、その報いによってあなたは天国での生活を、永遠の生活を左右されるわけです。どれほど神に近づけるのか、どれほど天国をエンジョイ出来るのか。今でも既にもうこれは始まっているんです。クリスチャンの間でも温度差があります。あの人たちは熱心だけれども、この人たちは随分と冷めている、生ぬるい。同じクリスチャンなのにどうしてこんなに差があるんだろうか。あるクリスチャンたちは神の愛を一身に受けている、バンバン受けている。神は愛だと高らかに歌っている。私はクリスチャンだけれども、いまいち神の愛なんて特別彼らほどは強く感じない。差があるわけです。差がもう出ているわけです。その差がそのまま天国に移行するとしたらどう思われるでしょうか。まずいなと。でも、その差を埋めることが出来

るんです。その差を変えることが出来るんです。それが今のこの時間です。あとどのくらい主があなたに命を与えてくださっているか。これは誰にも分かりません。今日このキャンプの帰りに、私は今日帰りますけれども、私は事故で天に召されるかもしれません。皆さんも急に突然何かあって死ぬこともあるでしょう。或いは生きたまま携挙されることも勿論あり得る事です。でもその時に遅くならないように、手遅れにならないように、号泣しなくて良いように。永遠に後悔はしないまでも、その瞬間これまでにないほどの後悔をする羽目になるわけです。それを避けなければ、後悔を減らしたければ、今からでも遅くはありません。今日からでも遅くはありません。今まで無駄なことをしてきてしまったと、もう悔やんでも悔やみ切れない、あの時を取り戻したいなんて思わなく結構です。もう取り戻せませんから。でもこれからの命は別です。これからの時間は別であります。今からの人生を、これからの生活を、イエスの名をあげるために、自分の喜びや保身の為ではなくて神の喜びのために、神の栄光のためにそれらを活用していくならば、あなたはキリストの御座の裁きにおいてそれほど泣かなくて済むかもしれません。「あの時、KAZU があんなに時間を超過してまで大声で張り叫んでいたけれども、まあそのうち考えますよ。家に帰ってからじっくり考えたいと思います。まだまだ自分にはやりたいこともあるし、まだ自分は若いですから。もうちょっと人生を謳歌してから、老後になってリタイヤしたら真剣にクリスチャンとして考え始めます。」その時は来ないかもしれないんです。ですから今、是非このことを主からのメッセージとして受け止めて頂きたいと思います。これを希望とするならば、きっと今あなたが思っているよりもっと素晴らしい教会生活、クリスチャン生活があるということを見出せると思います。そしてこれから辛いこともあると思います。でもこの希望があればその辛いことはもはや軽い患難と映ると思います。今まではヘビーだと。でもこれからは、永遠の栄光こそがヘビーだと。天秤にかければどうって事はない。天国ではもっとすごいことが待っているんだ。報いが、今褒められなくても感謝されなくても誰も見ていなくても、報いが、冠が、褒め言葉が待っているんだ。そしてそれが天国でも永遠にカウントされて、より一層天国をエンジョイ出来る。その永遠を楽しむことの出来るキャパシティー、受容能力というのが、この報い、或いは冠であります。もっと近いところで、もっと天国をフルに味わいたい、楽しみたい。そう願って私たちはこの地上生涯を活用することが出来るのであります。

これで終わりたいと思うんですが、最後に。“最後に”というのが名説教者の決まり文句なんです。「最後に」と言ってからが長いんですけども、でも今日はもう時間が、もう無理なので止めますが、C・T・スタッドという人が、この人は有名な宣教師です。世界規模の伝道団体を創立した人ですけども、この C・T・スタッドがこういう言葉を述べています。これは特に若い人にチャレンジをもたらす言葉、そして私の尊敬するチャック・スミスという人もこの言葉によって神からの召しを受けて牧師に召されていったという、その切っ掛けとなった言葉です。それはどんな言葉かと言いますと「人生は 1 度きり。あつという間に終わってしまい(異論はないと思います。)キリストのためにしたことだけが残る。」人生は 1 度きりです。もう過去は取り戻せません。あつという間に終わってしまうんです。まだまだ生きる、なんて思ったら大間違いです。キリストのためにしたことだけが残るんです。皆さん今まで、キリストのためにどれほどのことをしてきたでしょうか。それ以外の事は残らないんです。木、わら、草と同じです。何にも残らないんです。主の名によってしたことでもです。「主よ。主よ。」と言う者はだれでも天の御国に入るではありません。天の父の御心を行う者だけです。「あなたの名によって預言したではありませんか。あなたの名によって沢山奇跡を行ったではありませんか。あなたの名によって悪霊を追い出したではありませんか。いろんなミニストリーを、いろんな活動を、イエスの名によって。」でも、それは名ばかりで本当は自分のため、本当はイエス以外のためにそれらをしてきたならば、それらはカウントされないんです。あなたの過去の栄光は、ひよっとしたら何にもカウントされないかもしれないんです。でも、これからは違います。チャンスがあります。このチャンスを、人生は 1 度きりです。あつという間に終わってしまいます。キリストのためにしたことだけが残って、そしてかの日には「よくやった。よい忠実なしもべだ。あなたに沢山の冠を授けよう。報いを与えよう。」と。思い浮かべて下さい。毎日毎日、今日がその日となると、そのように生きるならば、今日このキャンプに来る前とその後では全然違うと思います。早くこの希望を掴んで下さい。早くこの希望を握りしめて下さい。早くこの希望に生きて欲しいと思います。「その希望は知っていました。聞いた事はあります。」

ではなくて、まさにこれを握り締めて、このために生きる。そういう決心を是非今日して頂ければ幸いです。

では最後にお祈りしたいと思います。「天の父なる神様。私たちは再臨の事は何度も何度もこれまでも聞いてきました。携挙だとか、空中再臨だとか、専門用語も知っています。聖書に書いてあることも知っています。しかし、本当にそれを真理として、自分の人生の指針として、毎日の生活における判断基準としてしっかりと握っていたでしょうか。しっかりとその希望に生きていたでしょうか。あなたは問われております。今までもしかしたら沢山の時間を、労力を、また資金を、持てるありとあらゆるものをあなたから頂いたにもかかわらず、無駄にしてきてしまったかもしれません。でも、これ以上もう後悔したくありません。どうかあなたが憐れんでくださって、もう一度奮い立ち、そして絶望から希望へと私たちを引き上げて下さい。諦めかけていた人たち、「もうどうせ私のクリスチャン生活などこんなものだ。先はもう見えている。この程度だ。」と、冷めて皮肉めいた冷笑的な考え方をしている人があったならば、そうではないということ、今一度知ることが出来ますように。そしてまた、この希望を初めて聞きましたという人は、どうか感謝して、「神様。この希望を教えてください。本当にありがとうございます。」と。希望のない者ではなく私たちは希望のある者として、もう悲しみ沈む必要はないと、そして具体的な未来が開かれているということ。どこか曖昧な目に見えない雲のような世界にいつか死んだら行くのではなく、そこは確実にあなたから表彰され、そしてあなたとの素晴らしい美しい美しい永遠なる交わりを、今までにない程に身近で、今までにない程に感動的に、今までにない程に最高の幸福を持って永遠に過ごすことが出来る。その特権が待ち受けているということ。どうかしっかりと胸に刻み、日々の生活をこれから見直していくことが出来ますように。イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。」有難うございました。